

槐

かい

岡井省二創刊

令和元年5月号

令和元年五月一日発行 第二十九巻第五号 通巻第三三五号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



無意識に

高橋将夫

野焼の火ときをり躊躇してをりぬ
天体の動きも止まるほどのどか
うなづいて又うなづいて剪定す
春眠の勝手に動く手足かな

足跡をかくすつもりか春氷

虚仮の世と知りつつも蛇穴を出づ

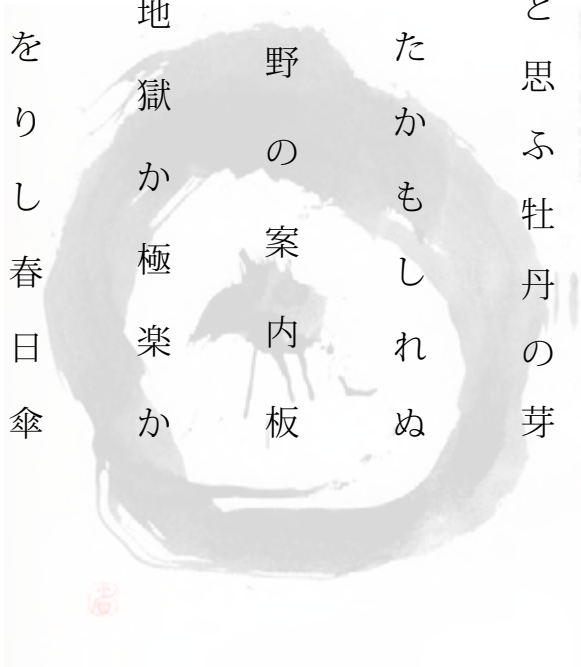
眠る間もおしいと思ふ牡丹の芽

春の夢現実だったかもしれぬ

現在地探す春野の案内板

この霞ぬけて地獄か極楽か

無意識に回してをりし春日傘



槐安集

水野恒彦

宇宙ゴミ唐獅子のあくび大きくて
永却と刹那のながき冬銀河
たそがれの遠嶺にはかに冬銀河
空海を山らんらん笑ひけり
凍裂の木霊を返す山の神

加藤みき

春障子さまざまな香を運びたる
姉さん被りてきばきと春の昼
大杉もこの這松も寒明くる
炭の香の漂ふ部屋に入りける
ぶらんこに土煙のりぶうらぶら

中島陽華



窓越しの冬日臙包みけり
師の恩や港明かりの冬薔薇
佛のアラン・ドロンと四日かな
法螺の酒廻しまはして松直し
ふくふくの唐人形や千代の春

竹内悦子

栓の木のまな板を買ふ初弘法
濡れてゐて日の当りをる実千両
熊野より句碑なでてゆく桜東風
花時の硯ひろげてをりにける
天網に引つかかりたる揚雲雀

雨村敏子

はる風の一番前にランドセル
チヨコレート売り場に君がゐて春
紅梅にやさしき時の流れけり
涅槃西風孔雀の羽の吹かれをる
千社札貼りたる夕べ亀鳴ける

本多俊子

ほのぼのとこの世に泛ぶ雛の眉
若みどり天地の鼓動伝へをり
青春といふ言葉好き桜貝
春露のやうに畠に立つてをり
小米花星のことばの添ふやうに

近藤喜子

薄氷の脆さいとほし人もまた
春泥や月面に踏み出すやうに
雪解や押し合ひ圧し合ひ谷の水
太陽にみな顔を上げ犬ふぐり
うぐひすや水の面ぱつと輝きぬ

瀬川公馨

たなごて掌にやらやら転ぶ春の日イ
スモーキーなこ糸の被さる春となり
暮れつ方ぽつりぽつりと浮寝鳥
豆撒やなへ糸を走る鬼のぬし
黄椽や冬の挽歌をうたふべし

柳川 晋

はじめりは小さな異変冴返る
亀鳴きて二匹が共謀の兎かな
AIとビッグデータと黄砂かな
野遊びやシェイクスピアは読まぬまま
ナポリより三月を見て死になさい

熊川 暁子

衣更着のうしろに母の背筋あり
秘め事を詰めてしまひし大氷柱
シーフードサラダに菜の花咲いてをり
死ぬための命を支ふ寒の水
ほろ酔ひの此の世がゆらぐ湯豆腐よ

寺田 すす江

さざなみの光の流る梅二月
梅咲くやほつほつほと心の灯
翻車魚のゆらりと躲す春の虹
音たてて二月の風の過ぎゆけり
鷹鳩と化して詩情の豊かなる

岩下 芳子

春筍を掘る手応への柔らかし
雛の客男女機会均等法
扇骨を晒す淡海のざらめ雪
春のランチ今日は一人でジャズ喫茶
雪雲に穴をあけたる青き空

有松洋子

ペガソスのはばたく音や春立ちぬ
路地奥に残り雪てふ色の水
たんぽぽや風やはらかに無縁塚
ミモザ咲くマリアの乳房吸ふ赤子
頂きに炎あひ抱く山焼ぞ

岩月優美子

春めくや殻を破れば見える景
春野より希望の詩の聞こえ来し
料峭やライフプランの振れ動く
小面の口角ゆるむ春の宵
一抹の不安に山葵効いてくる

近藤紀子

夜半の雨に早春の音ありにけり
寒明けや会ふときラメのマニキュアを
ティンパニが五体貫く春の宵
風花にたけき思ひを放ちをる
裸木のやうな一生と妣詠みし

竹中一花

蓮如忌の御ふみ唱ふやチョコレート
春色に変へる魔術師森の精
空の気と地の気とがるや寒戻る
直会に鬼と河童や春立てり
春風を呼ぶハーレーや県境

前田美恵子

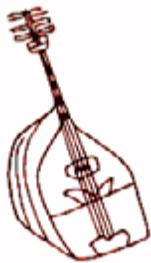
寒明くる一番列車見送りて
節分の鬼一列に休みをり
野生馬の駆け行く大地首稽
絵皿からはみ出してをり桜鯛
おこしやす声の艶めく弥生かな

中田禎子

神名備に人の気配や春隣
貝寄風や千石船の絵馬の数
春耕やこの土と水潮風と
影にある風の形や春障子
立春やハートのA^{エイヌ}動きだす

吉田順子

せせらぎの石ころころと春の歌
日と風の匂ひや梅の真つ白に
春なりしこころ齡を忘れをり
雪椿濡れてくれなゐ極まりぬ
里山の光なつかし惚芽吹く



槐市集

植木戴子

メロディーの聞こえしスマホ鳥雲に
浮き雲や緋梅で布を染めてをる
公園のカリヨンの音種選
廢校のチャイム鳴りけり桜東風
モザイクの光つてをりし春の潮

江島照美

没イチの時の長さや朧月
針供養夫も針持つ老後かな
国境を越ゆる自由や建国日
遺伝子の操るままに種選び
絶対といふまやかしや櫛の花

大塚たきよ

的に向く紙飛行機に春の風
店頭のコヨコさまさまや春隣
ふらここやけんかの後の二人乗り
下校児の緊張ほどけチューリップ
春炬燵歳時記開けしまま眠る

岡田桃子

かの災禍くぐり抜けたる蜜柑かな
冴返る今日の夕月只者ではない
梅園の先づ紅梅へ歩みけり
境内のエアーパーケット梅の香の
草木塔守りし列島菊根分け



荻布 貢

流れ去る景色の光春来る
青空に千木と日の丸紀元節
菜の花と比良を借景湖の色
認知症いやいやまだや春の昼
春風のいたづらスカート押さへをる

久保夢女

雪原を思ひ眠りにつきにけり
寒鴉不敬無敵の面構へ
鴨の陣隙だらけなり平和なり
軽やかなスキップ春の申し子なり
片笑くば押し呼び出す春もある

古賀恵子

春光や小児病棟丸呑みす
雪代や棚田の息吹はじまりぬ
背負はれし子の足跳ねしつくしんぼ
引揚げし姿のままや男雛
悲喜こもごも瓶に詰まりぬ針供養

阪倉孝子

手のひらへ風の運びし初音かな
木の芽風なつかしき声連れて来る
薬や満ちてくるものありにける
鬼やらひ吾にまく豆にぎりしめ
補陀落へ春光の波漕ぎ出づる

柴田靖子

メツチャ春待ちこがれある一日なり
啓蟄のさだめに生きてさからはず
夢遠し追ひておひかけ春の虹
彼岸桜この一秒を大切に
心良き疲労は春の眠りへと

庄司久美子

うららかや白きベンチに花林糖
春蘭や閻魔堂への谷の道
龍住むと言ふ山の池松の花
早春の丘にふたりや弥生土器
兄弟は推瑞玉よ昼の海

槐集

高橋将夫選

朧夜の火星地球を窺へり
岡崎 犬塚李里子

甘き夢つづき見たきよりラの冷え

神の手に打たれし凧か急落下

紅梅一花異次元よりのことば

この頃は亜流栄える蝸蚪の水

色彩の魔術師はここ春の庭
大阪 江島 照美

鈍色の心を赤く木瓜の花

人生はトリックアート山笑ふ

球根に話かけてる根分かな

山焼の目算狂ふこともあり

水の星命の星や下萌ゆる
藤田美耶子

隣国は近くて遠し春寒し

春風をまとひて歩む道新た

日だまりに恋のハミング蛭蝶

盆梅のとじ込められし梅の精

身をよせて春を待ちをる小鳩かな
岡崎 柴田靖子

重ねたる時のおもみを臥竜梅

AIに支配されゆく海市かな

思ひ出は時に宝よ春の星

一人居てひとりじやないよ春の闇

川の名の村は菜の花盛りかな
枚方 中 貞子

春光や金のさざ波鯉集ふ

忘れぬし吾も仏弟子涅槃の日

魔女の目の光もちたるシャボン玉

道ながら遊びをせむと蝿の道

雪しんしん仏のまとふ衣一枚
中島 昌子

好き嫌ひひとつに丸め雪礫

芹引くや雪より白き根現れる

春帽子小脇に祈りの長きこと

卒業子ぶつきらばうに帰り来る

銀河往來

◆槐集観照

神の手にうたれし 凧か急落下 犬塚李里子

凧の落下を神のなせる業とみたのは慧眼。

〈朧夜の火星地球を窺へり〉の句 昔は火星に火星人。今は地球の方が危険な星といえるのかもしれない。

〈甘き夢つづき見たきよりラの冷え〉の句、リラの冷えだけに「甘い夢」が恋しい。

〈この頃は垂流栄える蝌蚪の水〉はなかなか意味深長。

鈍色の心を赤く木瓜の花 江島 照美

心の色を鈍色から赤くする木瓜の花。俳句はそんな心の色を言いとめる。

〈色彩の魔術師はここ春の庭〉、〈球根に話かけてる根分かな〉の句もまた心の色。

〈人生はトリックアート山笑ふ〉の句、トリックアートは目の錯覚を利用した騙し絵のようなトリックのアート。思うに、人生もまた多くの場面で錯覚をしているのかもしれない。

水の星命の星や下萌ゆる 藤田美耶子

草木の芽吹く春。まさに地球は水が命を育む水の惑星。

〈春風をまとひて歩む道新た〉の句、新しい一步を踏み出す心意気に一票。

〈盆梅のとじ込められし梅の精〉の句、「盆梅」の侘びの世界と「梅の精」のメルヘンの世界の融合が魅力的。

重ねたる時のおもみを臥竜梅 柴田 靖子

そうか、臥竜梅のあの姿は時の重みのせいなのか。

〈一人居てひとりじゃないよ春の闇〉はことの本質に迫る。

道ながら遊びをせむと蜷の道 中 貞子

蜷の道も梁塵秘抄の世界でしたか。曲がりくねっているのは道ながら遊んでいるせいだったのだ。

〈魔女の目の光もちたるシャボン玉〉の「魔女の目」と「シャボン玉」との取り合わせはユニーク。

〈忘れぬし吾も仏弟子涅槃の日〉、私もまた一つの宇宙であり、仏性を持って生まれているのを思い出させる一句。

雪しんしん仏のまとふ衣一枚 中島 昌子

普段は気にしたことのない仏様の衣だが、確かに一枚。それを想像すると、雪の日の堂内の寒さがひしひしと迫ってくる。

〈好き嫌ひひとつに丸め雪礫〉、〈芹引くや雪より白き根現れる〉、〈春帽子小脇に祈りの長きこと〉、どの句からもこの作者ならではの感性が伝わってくる。

いつまでもあなたの隣梅はつぼつ 久保 夢女

いつも隣に居てくれる人がいるとはうらやましい限り。いつまでもそうでありますように。梅がなんともめでたい。作者の人が柄が溶み出ている一句。

寒明やひかりのかたち座る鹿 平野 多聞

寒が明けた陽光が鹿を包む。いや、鹿は光の形に座っているのだと作者は言う。〈以下略〉